

情報通信審議会 情報通信技術分科会 ITU 部会

放送業務委員会（第 57 回）議事概要（案）

日時：令和 7 年 5 月 19 日（月）10:00～11:50

場所：Web 会議(Webex)

出席者：

伊丹主査（東京理科大学）、大槻主査代理（慶應義塾大学）、
伊藤専門委員（日本放送協会）、岩崎専門委員（東京農工大学）、
岡村専門委員（（株）テレビ朝日）、甲斐専門委員（日本テレビ放送網（株））、
清水専門委員（（株）東芝）、武田専門委員（（株）フジテレビジョン）、
中田専門委員（（株）TBS テレビ）、西田専門委員（日本放送協会）、
濱崎専門委員（日本電気（株））藤井専門委員（日本放送協会）、
丸茂専門委員（（株）テレビ東京）、明堂専門委員（（株）KDDI 総合研究所）

説明員：

朝倉氏（日本放送協会）、大出氏（日本放送協会）、當山氏（日本テレビ放送網（株））、
近藤氏（（株）テレビ朝日）、薮氏（日本放送協会）

事務局：

総務省 情報流通行政局 放送技術課

渡邊技術企画官、柴田補佐、佐伯係長、飯塚官、水田官

【配布資料一覧】

資料 放-57-1	放送業務委員会(第 56 回)議事概要(案)
資料 放-57-2	WP6A 会合報告書
資料 放-57-3	WP6B 会合報告書
資料 放-57-4	WP6C 会合報告書
資料 放-57-5	SG6 会合報告書
資料 放-57-6	<u>次回会合に向けた今後の対応（案）</u>
資料 放-57-7	<u>勧告に係る提案の承認可否（案）</u>
資料 放-57-8	今後の検討スケジュール（案）
資料 放-57-9	放送業務委員会構成員名簿
（参考資料）	
資料 放-57-10	<u>郵便投票関連文書</u>
（参考資料）	

※下線部の資料は構成員及び関係者限り。

議事概要

1. 配布資料の確認

事務局より、配布資料の確認が行われた。

2. 前回議事概要の確認

伊丹主査より、資料 放-57-1「放送業務委員会（第 56 回）議事概要（案）」に基づき、第 56 回放送業務委員会の議事概要案の確認が求められた。議事概要案について構成員からの意見はなく、案のとおり総務省 HP に掲載することとなった。

3. ITU-R SG6、各 WP 会合の結果について

3.1. WP6A 会合の結果について

朝倉氏より、資料 放-57-2「WP6A 会合報告書」及び資料 放-57-6「次回会合に向けた今後の対応（案）」に基づき、WP6A 会合の結果について説明が行われた。質疑が行われた後、案のとおり承認された。質疑応答の概要は次のとおり。

武田専門委員： 5G ブロードキャストについて各国で取組みが進んでいるようだ。元々、3GPP で標準化されたものと思うが、現在、ITU-T における検討の動きやリエゾン等はあるか。また、日本国内では 5G ブロードキャストについて検討しているか。

朝倉氏： ITU-T における動きは承知していない。5G ブロードキャストは 3GPP で活動が行われており、3GPP での活動が ITU-R の SG6（放送業務）にも報告されている。国内の動向としては、技術検証レベルにとどまっている印象。5G ブロードキャストを用いた電波の発射は、地デジに関する無線局免許では実施できないため、野外実験は難しい。なお、中国では、政府が 5G ブロードキャスト放送の実施を決定している状況と承知している。

西田専門委員： 日本の高度化地デジ規格（ISDB-T3）の ITU-R 勧告化提案に関して質問したい。本年 3 月に、ISDB-T3 に関する ARIB 標準規格が策定されたことを受けて、次回 SG6 関連会合には、同規格に関するシステム仕様の勧告化の提案ができる状況と認識している。他方、実導入に向けては、プランニング基準等の他の勧告化も必要と考えられるところ、今後の標準化に向けた方針を伺いたい。

朝倉氏： プランニング基準、具体的には混信保護比や周波数許容偏差等に関しても、ISDB-T3 のシステム関連技術と合わせて標準化していく必要性については理解。しかし、プランニング基準に関しては、国内において承認が得られた状況ではないため、日本として具体的な内容を提案することは難しい状況。プランニング基準に関する技術的な検討は行っているため、国内で承認が得られた場合には標準化の提案は可能。まずは国内からと考えている。

西田専門委員： ITU-R への提案に際しては、国としての判断も必要なため、総務省との調整も大事と思う。技術的な観点では、各国の第二世代地上デジタルテレビジョン放送に関する一連の ITU-R の勧告・レポートにおいては、プランニング基準に関する勧告とは別に、一つの地デジシステムには様々なパラメータの自由度があり、その

パラメータをどう選択するのかという観点で指針をまとめたレポートもあると認識。このような関連する他の勧告・レポートに対する提案も含めて、ISDB-T3に関する国際標準化についての今後の方針を考えていく必要があるのではないかと思う。

朝倉氏：パラメータ選択に関するレポートに関しては、SG6 所掌の既存の勧告・レポートを見直すために設置された「Doc review」のラポータグループにおいても言及があったところ。現在、当該勧告においては、米国・韓国の地デジ規格（ATSC）及び欧州の地デジ規格（DVB）に関する記述はあるが、当然のことながら ISDB-T3 に関する記載は未だない。まずは、次回会合において提案予定の ISDB-T3 のシステム仕様の勧告化を目指し、その後、他の勧告・レポート等への寄与についても検討したい。

3.2. WP6B 会合の結果について

大出氏及び當山氏より、資料 放-57-3「WP6B 会合報告書」及び資料放-57-6「次回会合に向けた今後の対応（案）」に基づき、WP6B 会合の結果について説明が行われた。質疑が行われた後、案のとおり承認された。質疑応答の概要は次のとおり。

藤井専門委員：放送サービス受信の入口を従来のチャンネル選択からアプリケーション選択に変える新たなテレビに関する新レポート草案（6B/110 Annex1.2）に対して、グローバルプラットフォームの考え方に沿うものであるという評価がされている。これは、放送のグローバルプラットフォームにおけるコンテンツ配信・受信のシステムに関する新勧告草案（6B/110 Annex1.3）のシステムアーキテクチャと併用しても矛盾がないという意味か、それとも、全く別のシステムなのか。

當山氏：6B/110 Annex1.2 はブラジルの提案である。これは、視聴者がテレビ画面を開いたときに、地上波やインターネット配信などの伝送路を意識することなく番組を選択できるようにするというコンセプトであると認識。これは、6B/110 Annex1.3 のグローバルプラットフォームの考え方に沿っていると考えているが、放送コアネットワーク（BCN）とは異なるものと思う。

西田専門委員：最近では、WP6B に対して、特に中国やブラジルからの寄与が増え、新しい取組みが紹介されて、それに基づく ITU-R 文書の作成が活発である。具体的には、先ほど質問のあったアプリケーションベーステレビや、手話アバターを受信機側で生成するためのアプローチの紹介等。これらはブラジルの次世代地デジ規格（TV3.0）で導入を目指していると聞いている。テレビそのものを魅力的なものにするような新しい提案がされており、是非日本としても見習って取り組んでいければよいと思う。

3.3. WP6C 会合の結果について

大出氏及び近藤氏より、資料 放-57-4「WP6C 会合報告書」及び資料放-57-6「次回会合に向けた今後の対応（案）」に基づき、WP6C 会合の結果について説明が行われた。質疑が行われた後、案のとおり承認された。質疑応答の概要は次のとおり。

西田専門委員： ラウドネス測定法に関して、48kHz を超えるサンプリング周波数の音声信号について、フィルター特性の明確化で対処するという方向と理解した。一方で、48kHz を超えるサンプリング周波数の音声信号を放送で用いることについて、ITU-R 会合における議論の状況を伺いたい。国内でも、ある放送事業者がハイレゾ対応スタジオを整備したという記事を目にしたところ、今後ハイレゾ音声を送信制作で扱うという事例が増えていくのか、それを視聴者にも届けるといった考え方も出てくるのだろうか。

大出氏： 現状、国内の ARIB でも ITU-R でも、放送波にハイレゾ音声を乗せる議論は全く出てきていないという状況。ただ、先ほど指摘があったように、ハイレゾを使うこと自体は、制作段階では行われているところがいくつかあり、マルチチャンネルでもオブジェクトベースでもそうだが、他社との品質差としてハイレゾで作っていることを売りにしている会社があり、放送波に乗せる以外の利用が行われている。放送以外の利用に対して番組提供するための制作を放送局も行っている事例があり、現在、96kHz、192kHz といったサンプリング周波数の音声信号の議論が出てきているという状況と思う。

西田専門委員： ハイレゾ音声を視聴者に放送波で直接届けるという話までは至っていないが、制作段階では増えつつあるという状況と認識した。コンテンツ交換の仕様として、48kHz を超えるサンプリング周波数の音声信号を規定する必要性についての議論はどうか。

大出氏： 現状としては、放送局間は 48kHz で十分であるという認識の方が強いと思う。あくまでも放送局から放送以外に提供するコンテンツに関して高い周波数が使われているというのが現状である。少なくとも、前回の ITU-R 会合の中では、放送局間でのハイレゾ音声番組の交換というのはないという認識で議論が行われている状況。

西田専門委員： 先ほど WP6B で発言したように、ここ最近、WP6C にも中国からの寄与が増えている印象を持っている。今のところ、中国からの提案も HDR-TV に関する提案が中心であり、イマーシブサービスやイマーシブコンテンツに関する提案までには至っていない。WP6C においては、日本からイマーシブコンテンツやイマーシブサービスに関する取組み事例に関する寄与文書を提出してレポートに反映するというところまで行ってきたところであるが、今回の報告によれば、イマーシブメディア関連の議論は 6DoF 音響関連のみのようである。それ以外に、イマーシブコンテンツ、イマーシブメディア、イマーシブサービスの今後の方向性について、会合参加者の印象や今後の方針についての意見はあるか。

- 近藤氏： 中国からの寄与文書が増えているという印象は私も同じ。米国から提案があったが、HDR に関しては、SDR と互換性を確保して何かサービスを行うとか、動的メタデータを用いて視聴者にかっこいい映像、没入感のある現場にいるのと同じような体験ができる映像コンテンツを届けようという動きが出ていると感じた。
- 西田専門委員： HDR-TV 関連の議論は、現状または直近の課題への対応であると思う。是非、将来を見据えたメディアについての議論も活発になればよいと感じている。

3.4. SG6 会合の結果について

薮氏より、資料 放-57-5「SG6 会合報告書」に基づき、SG6 会合の結果について説明が行われた。質疑が行われた後、案のとおり承認された。質疑応答の概要は次のとおり。

甲斐専門委員： 今回の報告に直接関係することではないが、ステアリングコミッティや関係者の中で、今の SG6 のスコープや、6A・6B・6C という WP の構造について、今後何か新しい要素を追加すべきといったような議論はあったか。

薮氏： SG6 会合においては、そういった議論はなかった。

西田専門委員： SG6 の WP の構成の見直しは表立っては議論されていないと認識。一方で、SG6 のスコープについては、SG6 の下に設置されている、放送の将来を検討するラポータグループ「RG-F0B」において、SG6 のスコープに関する話題も出てきている。ただし、提案が出る可能性がないとは言えないという程度であり、具体的な話は出ていない。最近開催された RAG 会合においては、ITU-R 傘下の SG の構成・所掌の見直しについて話題に上がっていた。ただし、特定の SG についての具体的な話には至ってなかったと思う。

4. 勧告に係る提案の承認可否について

事務局より、資料 放-57-7「勧告に係る提案の承認可否（案）」に基づき、ITU から照会されている勧告改訂案 3 件について説明が行われ、特段意見なく承認された。

5. 今後の検討スケジュールについて

事務局より、資料 放-57-8「今後の検討スケジュール（案）」に基づき、今後のスケジュールについて説明が行われた。

以上